

第5回 鶴岡会場 12月18日(火)

いま地域づくりに大切なこと ―飛島の試みを事例に―

教授 伊藤 真知子 准教授 呉 尚浩

今日は「いま地域づくりに大切なこと～飛島の試みを事例に」というテーマで、前半は伊藤から「とび魚だしプロジェクト」（以下、「とびプロ」）についてお話しさせていただきます。平成24年度「輝けやまがた若者大賞」を受賞したプロジェクトです。「眠れる自然資源にスポットを当て存在感のあるものに仕立て島民を巻き込んだの活動で地域活性化に寄与していること」が受賞理由で、学生たちが頑張ってきたことが評価され、大変嬉しく光栄に思っています。

2009年、「とび魚のつゆ」の農商工連携事業に公益大が連携参加して、学生を募ってとびプロは発足しました。「絶品とび魚だしめんつゆ 贅沢ストレート」という商品について、JA山形農工連と山形県漁協が連携し、そこに公益大が参加して商品開発を行い、販売戦略・販促活動を進めてきたという6次産業化の事例です。安全安心という観点から、化学調味料無添加に出来ないだろうかと大学から提案し、それがこの商品の特長の一つとなりました。

公益大では、2010年度に「公益社会演習」という、分野融合の演習科目を新設しました。そこで、呉先生と私とで、とびプロの一環として、「とび魚だし」と地域活性化をテーマとする演習を3年間開講してきました。7月初めの飛島での合宿(1泊2日)で、とび魚漁の網から魚を外してさばいて開いて炭火で焼いて天日に干す、という一連の作業体験が演習のメインイベントです。同時に、漁師さん等にインタビュー調査を行い、それをまとめて、最後に発表会を行うという演習です。インタビューでは、漁業、高齢化、人口減少、福祉や医療など島の様々な課題や昔からの言い伝え等についてお聞きました。

プロジェクト活動としては、「とび魚だしめんつゆ」のネーミング・パッケージの決定、販促活動や合宿で着用するTシャツのデザイン、めんつゆを使った新レシピ開発&試食、SKTバーガー（めんつゆのジュレを使用）の開発・試食・販売、パンフレット制作、各種イベントへの出展・発表などを行ってきました。

さて、とびプロの成果・意義は、三つほどにまとめられると考えています。

一つは、学生たちの成長です。主体性を獲得し、みずから考え行動する学生へと変化を遂げてきました。そこには、「先輩から後輩へと引き継がれるリーダーシップ」の自覚ということがあります。先輩たちが皆の前で発表したり、話し合いをリードしたり、漁師さんへのインタビューをしたりする姿を、自分たちもあぁなりたいと思って見てきた。だから翌年は、自分たちがやるんだという主体性のある行動ができていく。また、真剣勝負の現場の大人たちの厳しくも温かいまなざしや指導・助言があり、現場のリアリティーに触れる体験をしてきたということも大きい。高齢の漁師さんが、まだ暗いうちから船を出し、前日張った刺し網の重い網を引き上げて、戻ってきて、そして炎天下で炭火焼き、天日干しをする。あるいはJ A山形農工連の工場で、衛生面に非常に配慮して製造している。そうした現場に触れ、温かくも厳しく見守ってくれる関係者の指導や助言によって成長したと言えます。さらに、「島民との交流・触れ合いを通じた島の課題」に気づき理解し、その切実さに共感することによって、当事者意識や自分事として行動するという自覚が生まれてきました。自分たちが頑張って活動することが、飛島の活性化につながり、漁師さんたちの思いや丁寧な手仕事に應えることになると認識するようになったのです。

二つ目に、飛島では、山形県漁協への焼干しの出荷が進み、島の経済が変化しました。2012年は大漁で、十何万匹のとび魚が確保できました。プロジェクトが関わり、特に学生たちが介在したことによって、漁協も努力されて、島の漁師さんと漁協の関係が改善したのです。とび魚だしは、島の外で作られブランド作りが進んだのですが、熱心に作業する学生たちの姿が漁師さんたちの心を動かし、「自分たちのもの」となっていった。変化を嫌う漁師さんたちが、自分たちも頑張って「とび魚だし」を売って来ようと仙台のイベントへ出かけるようになりました。

学生たちの活動が島の経済に変化をもたらしたのです。三つ目に、農商工連携事業（2012年度が最終年度）としてのとびプロは、売り上げが好調で、一定の成果をあげているといえます。「産学官連携のモデルケースといえるのではないか。事業主体、共同事業者及び連携参加者が当初の計画以上に有機的に連携構築し産学官連携のモデルケースになりうる」（中小機構東北支部庄司孝一プロジェクトマネージャー）という評価をいただきました。最後に、地域づくりに大切なことという点で、二点お話しします。一つは、「若者の力を信じる」ということです。地域づくりまちづくりには、「よそ者、若者、ばか者」が必要と言われますが、やっぱり若者の力を信じて、彼ら彼女らが力を十分発揮できる場を作り、大人たちが惜しまず支援していくことが大事ではないか。仲間とともに活動する中で主体的・自発的に考え行動する力が引き出されていくことをエンパワーメントと言います。そのための支援の加減が難しいと思いますが、指導ではなく、横からの支援が大事だと考えています。もう一つは、「異なる者同士の対話と共感を促進する」ということです。異なる年齢や異なる立場の人達と協働して対話して、共感を得ることのできる場を作り、同じ方向を向いてともに歩む場を促進することが大事です。「ファシリテーション」ということですが、これができる人材を増やしていきたいと思います。

「とび魚だし」は、外から来た課題でした。富樫滋さん（山形県企業振興公社経営支援部＝当時）という、公益大を加えとうまくいくのではないかと考えて、つないでくださった方がいたおかげで、このプロジェクトが始まり、成功しました。外からの課題を引き受けていく中で、内発的な取り組みになっていくことがあり得ます。何事かを当事者として引き受け、それを育てていく場を作って支え、コミュニケーションしながら協働することが大事だと感じています。

呉尚浩です。とび魚だしプロジェクトの活動が活躍できる舞台づくりとしての「とびしま未来協議会」（以下、協議会）の話をします。

まず、地域住民の主体的な発想や行動を核とし、地域資源を持続可能な形で活かす「内発的地域づくり」を考えましょう。ここで地域住民とは、昔からの住民だけでなく、Iターン、短期の協力隊、応援団も含めて考えます。継続的にその島の公益的な課題と関わっていこうとする人たちを含めて地域住民の定義を考えることが重要で、

私たちはそれを「公益的な民の力」と呼んでいます。

ところで、12年前から飛島と関わっていますが、素晴らしい自然、昔ながらの漁村の原風景と出会い、心を動かされました。その中で出会ったのが、海ごみと過疎高齢化の問題です。01年度に始まった飛島クリーンアップ作戦は、NPO、行政、島民、大学、企業団体、海上保安部の協働で毎年実施されて12回目を迎え、ようやく本来の浜の姿がよみがえりつつあります。

今日のテーマは「いま地域づくりに大切なこと」ですが、一番大切なのは、島民、応援団（NPO、大学、協力隊等）、行政といった人たちが、いかに心一つに島の未来に希望を描きかつ実践できるか、そうでない場合はどのようにその仕組みを提供できるかがポイントだと思います。

クリーンアップ会場の田尻海岸は、私たちの視点から見ると「飛島」の海岸ですが、島民から見ると中村の浜です。日頃は、法木の方も勝浦の方も入らない。入ると密漁の疑いで見られる。よそ者が入り、三つの集落を越えて一つの砂浜を飛島の人たちが一緒にきれいにすることで、初めて「飛島の浜」という認識が誕生します。

当然、有事の際には飛島として一致団結しますが、日頃はまだまだ昔ながらの集落ごとの視点が大きく、この壁をどうやって越えるかが課題であると同時に、集落ごとの特性を活かす仕掛けも重要です。

ここで島づくりの年表を見ましょう。01年以前には、運動会や文化祭などのみでしたが、01年にクリーンアップが始まって以来、ごどいも食べさせ隊、天保そば保存会など、さまざまな島の応援団の活動が誕生しました。

04年に天保そばを島の方に無料で振る舞い、学生が飛島音頭を復活させるなど、応援団が島民に感謝する会として「天保そば&ごどいも収穫感謝祭」がはじまりました。応援団と一緒に実行委員会を運営し、島民と楽しいひとときを共にするこの祭りの登場で、応援団同士、応援団と島民の結びつきが深くなっていったのです。

そして07年に県の委託で私たちが離島振興推進調査を実施しました。その中で始まったのが、新潟県の佐渡島・粟島、飛島で年に一度、各島持ち回りで開催する三島交流会です。佐渡の呼びかけで、佐渡と飛島にしかないトビシマカンゾウの保全活動を一緒にしまししょうと、また粟島も両島の間にあるので、一緒になって自然資源を活かした島づくりを学び合う会として始まりました。

酒田の都市部の人が言っても、なかなか島民の心に響かない。しかし隣島が頑張っている姿を見ると、自然に

島民も刺激されて島づくりへの意識が高まっていくことを期待して始めました。結果は予想以上で、佐渡で保全の方法を学んだ島民が、飛島でも自主的にカンゾウ保全を始める動きが出てきました。またクリーンアップが粟島でも実施され、漁業者同士の交流が実現し、三島を結ぶ観光船ルートが機を同じくして登場するなど、多様な広がりを見せています。三島交流を機に、島の方もだんだんと島づくりに対する内発的な思いが高まり、島内外の各活動がクロスしていくような形になってきました。

私たちがもうひとつ提案したのは「しまの家」です。島の玄関口に観光案内所がなく、学生が島に二週間くらい夏季に滞在し、島巡りのガイドやギャラリー展示をするもので、NPOとの共創活動に発展しました。

そういう活動の積み重ねの中で生まれたのが、島民・島の応援団・行政が共に島の未来を語り実現する場としての「とびしま未来協議会」の発足です。島の方にお話を伺うと素晴らしいアイデアを一人ひとり持ちです。しかし、皆のいる場では自分の意見をなかなか出せず、合意形成の場が弱体化している。そこで、先の離島振興推進調査では、井戸端会議的な場と公に物事を決める協議会の二つが必要だということを、公益大の澤邊みさ子先生、小関久恵先生、あと当時大学院生の林久美子さん、柴田大輔さんと提案しました。

それが、三島交流、しまの家と自由に島の未来を語る場が出来てきて、風穴が少しずつ空き、昨年2011年5月に協議会が立ち上がりました。

一年目は、仙山交流イベントへの出店と、アイランダーという東京の池袋サンシャインシティで開催される年に一回の全国の島の祭典（国交省、日本離島センター主催）に出店することで、飛島をアピールする事業です。

二年目には新たな事業を開始しました。一つは、井戸端会議的に島の未来を語る場としての「しまCafé」です。海水浴場の海の家がなくなり、おみやげ店、食堂も減ってきているために、島の食材を使った軽食やスイーツ、飲み物を提供するしまCaféをオープンしました。とび魚バナナといって、とび魚だしめんつゆが使われているジェラートがとても人気です。ごどいもバター、しまCafeカレーもあります。7月中旬から9月中旬の2ヶ月間で4241名、一日あたり平均約62名の来客ということで、大変好評を博しまして、そのせいか定期船の乗船数も今年は増えております。ニュースで見たり、飛島ファンの吉村県知事から紹介されて訪れた方もいらっしゃいました。

来年度は、5月の連休前から9月末まで開業する予定です。今年は県の「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」の助成をいただいておりますが、今後は自立する必要があります。島民同士の井戸端会議的な場所でもあるので、移動しまカフェとして、各集落でのカフェもさらに行っていくつもりです。

それから、今年の二つ目は「飛島や」セットの開発販売。これは、とび魚だしそばつゆ、天保そば乾麺、これをセットにして、とびしまの顔となるお土産品として売りだしたもので、酒田市から助成を受けています。

もう一つの大きな事業は、十年に一度の離島振興計画づくりです。これは飛島だけでなく全国の島で一斉に策定するのですが、それに合わせて法律も改定されます。そこで、飛島での島づくりの課題や取り組みを、現在国交省がとりまとめている「離島振興基本方針」策定へ活かすために提言する機会もいただいています。また、今回の離島振興法改正では、離島振興計画の作成にあたり「住民の意見を反映させるための必要な措置を実施」することが明記されましたが、全国の離島では一部離島（離島地域で一つの自治体を形成している場合を全域離島と呼ぶのに対し、本土側を含む自治体の中の一部に離島地域がある場合を指す）も多く、住民主体はまだしも、住民の声を聞く仕組みすら持っていない島が多数あり、そういった中で、協議会を設立し、合意形成から事業の実施にいたるまでに取り組んでいる先進的な事例として注目されていることはうれしい限りです。

飛島では協議会が公益大と協働し、島民、帰省者、来島者への方へのアンケート調査を実施。そして「とびしまの未来を語る会」という、アンケート結果をもとに島民と語り提案する会を数回開き、協議会案を作成し、この提案を取り入れ、現在県と市で作成しています。

この協議会案の目玉は、「協議会の仕組みと事業の充実」「拠点施設の整備」「しまびと募集」です。ここ数年で島に若い人の姿が見え始めてきました。09年に9年ぶりに小学校が再開（現在は中学校も）したというニュースがありましたが、今年からは緑のふるさと協力隊が導入され、協議会の事務局スタッフも駐在しています。旅館の息子が数人、中にはお嫁さんを連れて戻り、Iターンとして芸工大卒の女性が福祉の仕事で移住。若者同士が自主的に連携する動きもあります。

協議会を島民の方からさらに認知してもらうためには、観光向けだけではなく、島民の生活に密着した事業が重

要と、防災計画づくり、移動販売車の実現などを優先項目として考えています

このしまCaféをひとつの拠点として、島の希望を紡いでいく場や人のつながりがますます発展していくことを願っています。

Q：私は07年の離島振興推進調査の県の担当者でした。「とびしまップ」という、十年くらいを見据えたロードマップを作成いただきましたが、これは無理だろうと思っていたことが、3年くらいで実現したのももあり驚きました。しまCaféにも行きましたが、雰囲気がとても良かったです。若い人も移り住み始め、島に新たな風が吹いていると感じます。飛島の未来が、彼らにかかっていると期待しています。

A：07年に描いた絵から、小中学校の復活とか、介護システムの再構築等、様々なことが実現しました。今の70・80代以上の高齢者を支える世代が50・60代。現在は上手く回っているように見えますが、50・60代の人たちが、その歳になった時に支える人がいない。そういう時に備えて「支え合いコーディネーター」を、新しく導入していく必要性をいま提案しています。

面白いと思ったのは、絵を描いてその通りに計画を実行することも大事ですが、絵を描いたら5人家族が介護事業所立ち上げて移り住んでくれました。その方には3人の子供がいるので、小中学校が再開するなど、直接働きかけたわけではないのですが、絵を描くことで、そこから共鳴し「ひと・もの・こと」が現れるという不思議な効果があるようです。ビジョンを明確にしていく。ビジョンが公益的に、皆がWin-Winの関係で繋がっていくビジョンを作っていく重要性を感じます。こういった絵をどの地域でもしっかり描いて、関係者がその絵を共有していくことがとても大事ではないでしょうか。

Q：酒田市職員で、飛島クリーンアップを最初の3年間ほど担当していました。今日のテーマ「内発的地域づくり」ということで、大学を中心にして10年以上働きかけ、さまざまな動きが出てきたことに改めて敬意を評します。本来であれば、地域に強力なリーダーが出るのが望ましいでしょうが、変化のなかったところにいろいろな動きが出てきて、飛島ではそこまでに大学が果たしてきた役割は本当に大きいと思います。クリーンアップも行政だけではできなかったことで、NPOや大学も含めて全国に発信しています。今後も若い人がリーダーになって、周りの人を巻き込んでいって欲しいと思います。

A：07年に佐渡で開催された第5回海ごみサミットを機に三島交流が始まりました。海ごみ問題と地域づくりが相乗効果で活性化するという面白い効果があります。

Q：大学の事務室に勤めています。公益大は、就職がよい大学です。企業の面接時に、当意即妙に相手の言うことを理解して答えることが大切ですね。活動を通して地域の問題についての的確に理解し、自分の頭で考えて意見を述べることができる能力が育まれます。それには、大学で教えているだけではダメです。町や島や中山間地に出かけ、問題を住民のみなさんに直接聞いて、なるほどここに問題がある、こうじゃないか、ああじゃないかと考えていくことが、就職につながると思いますので、今後とも地域のご支援をよろしくお願いします。

Q：とび魚だしのことも含めて、島の未来をどのように思われますか？これからは、夏場だけ島で仕事をし住むなどの自由な発想が必要では？

A：島に関わっている同じ研究メンバーで、公益大の民俗学の非常勤講師の岸本誠司先生がいらっしゃいますが、岸本さんによると飛島の漁業形態は個人主義的で競争的な形態だそうです。新たな漁業後継者を迎えるには共同漁業として、サラリーマン的な漁業から入る方が容易だと言われており、飛島でそのような形態を導入していくことは大きな課題です。また、とび魚ですが、炭焼き、天日干しという製法は珍しい。しかも飛島はそれに限らず、イカの塩辛などさまざまなところで、手間暇をかけた全国に誇る非常に高い加工技術を持っているとのこと、それをアピールしていきたいですね。

それから、自由な発想が必要ですね。しかし、どこまで今の島の方々が受容できるかが課題です。粟島でも当初協力隊で来た方には、全員残ってもらいたいと考えていたようですが、多様な島との関わり合いがあることがわかってきた。飛島では、ほとんど全員が酒田に家を持っており、個々の家の存続はもはや飛島という地域がなくなってもできる面が多い。そういう状況でもう一度地域を残す重要性や希望を再生させていくことは大きなチャレンジだと思っています。

Q：よそ者として入り、このような共創的な場やCaféを生み出してきた苦労話を教えて下さい。

A：やはり、近道はなく継続が最も大切です。一過性ではなく、継続的かつ公益的に地域に関わっていく姿勢を見せてきたことが、信頼関係の醸成につながり、今があると思います。